

東京大学大学院教育学研究科附属学校教育高度化センター  
研究プロジェクト「学校教育の質の向上」(2008)

# 現行学習指導要領における 探究型学習の現状分析 ～学校図書館とのかかわりから～

生涯学習基盤経営コース

D2 松田 ユリ子

D3 今井 福司

D1 金 昭英

指導教員 根本 彰 先生

# 発表の流れ

- 1 問題背景
- 2 研究目的
- 3 用語の定義
- 4 研究方法
- 5 事例
- 6 考察
- 7 日本の高等学校における探究型学習の課題
- 8 提言
- 9 今後の課題

# 1 問題背景

1) 現行学習指導要領が高等学校で本格実施された2005年以降, 「探究学習」や「総合学習」がカリキュラムに多く取り入れられると思われた。

しかし, 多くの高等学校のカリキュラムは依然として系統型学習カリキュラムであり, 「探究学習」や「総合学習」は「総合的な学習の時間」を中心に一部の教科への部分的な導入に留まっている。

# 1 問題背景

2) 日本の学校においては、学校図書館法によって学校図書館を学習支援や読書支援に生かすための最低限のインフラは整っているはずである。

しかしその割には、学校図書館が特に学習支援に生かされていない現状がある。

## 2. 研究目的

本研究は、日本の高等学校における「探究学習」や「総合学習」の現状を明らかにするとともに、こうした教育での学校図書館の現状や果たすべき役割を実証的に考察することを目的とする。

高等学校を選択した理由は次の2点である。

- 1) 中等教育の最終段階であり、進路が大きく分かれるポイントである。
- 2) 学校図書館専門職である学校司書が多く配置されている。

# 3. 用語の定義

1)「探究型学習」

2)「学校図書館」

3)「学校図書館の機能」

### 3. 用語の定義 1)

## 「探究型学習」:

「課題の設定」「調査(文献調査・フィールドワーク, 実験, 観察等の活動)」「整理・分析」「まとめ・表現」という一連の探究活動のプロセスに主体的に参加することを通して, 内容知と方法知をバランスよく習得していく多様な学習方法・形態の総称

## 3. 用語の定義 2)

### 「学校図書館」:

- ・学校教育において欠くことのできない基礎的な設備  
(学校図書館法第1条)
- ・小学校, 中学校及び高等学校において, 図書, 視覚聴覚教育の資料その他学校教育に必要な資料を収集し, 整理し, 及び保存し, これを児童又は生徒及び教員の利用に供することによって, 学校の教育課程の展開に寄与するとともに, 児童又は生徒の健全な教養を育成することを目的として設けられる学校の設備 (同第2条)

### 3. 用語の定義 3)

## 「学校図書館の機能」:

「学習センター的機能」

「情報センター的機能」

「読書センター的機能」

文部科学省 『新しい時代に対応した学校図書館の施設・環境づくり』 2001

# 4. 研究方法

- 文献研究, 訪問調査, インタビュー調査

- 調査対象校: 日本の公立高等学校

- 対象校:

- (1) カリキュラムの特徴

- (2) 学校の種類

- (3) 地域性

について, 比較検討が可能なケースとして選定

# 調査対象学校の一覧

高校名	地域性	学校の種類	カリキュラムの特徴
神奈川県立 湘南高等学校	神奈川県 都市部	全日制／定時制 普通科	系統型学習
神奈川県立神奈 川総合高等学校	神奈川県 都市部	単位制による全日制 普通科	系統型学習・探究型学 習の併用
京都市立 堀川高等学校	京都府 都市部	全日制 普通科／専門科(情報)	普通科:系統型学習 専門科:探究型学習
群馬県立 尾瀬高等学校	群馬県 農村部	全日制 普通科／専門科(商業) ／専門科(理数)	普通科／商業科:系統 型学習 理数科:探究型学習

# 5. 事例

- (1) 神奈川県立湘南高等学校
- (2) 神奈川県立神奈川総合高等学校
- (3) 京都市立堀川高等学校
- (4) 群馬県立尾瀬高等学校

# 5. 事例(1) 湘南高校

## 1) 学校の特徴:

- 戦前からの旧制中学をルーツに持つ伝統校
- H19年度より文科省「学力推進進学重点校」
- 進学する生徒が大多数

# 5. 事例(1) 湘南高校

## 2) 探究型学習

■カリキュラム上で明確に位置づけはされていない

■授業の中で個別に行われる場合もある

■総合的な学習の時間:

1年次 読書(レポート・ディベート)

2年次 修学旅行下調べ

3年次 キャリア学習

# 5. 事例(1) 湘南高校

## 3) 学校図書館

### ■ 探究型学習との関わりにおける特徴:

クラス単位で図書館を使って授業することがほとんどない

# 5. 事例(2) 神奈川総合高校

## 1) 学校の特徴

- H7年県の高校改革の先駆けとして開校
- 県内初の単位制普通科高校
- H19年度より神奈川県教育委員会「発展的な学力向上」重点推進校
- 進学する生徒が大多数

# 5. 事例(2) 神奈川総合高校

## 2) 探究型学習

### ■「総合的な学習」:

1年次後期 「テーマ学習I」(テーマ探し)

2年次後期 「テーマ学習II」(テーマ研究の準備)

3年次前期 「テーマ研究」(学習活動の集大成)

### ■教科と自由選択科目(5つのフィールドのいずれか)で学んだ内容を, テーマに結びつける

### ■3年次5月に中間発表会, 7月に公開発表会とレポート提出

# 5. 事例(2) 神奈川総合高校

## 3) 学校図書館

### ■ 探究型学習との関わりにおける特徴:

- ・ 開館時間中を通して生徒が個別に図書館を利用
- ・ 1年生が基礎学習・文献探索を始める10月と、  
全学年がレポートをまとめる2月の利用が特に多い
- ・ クラス単位の利用は、あまり見みられない

# 5. 事例(3)堀川高校

## 1) 学校の特徴

- H5年京都市立高校改革パイロット校
- 普通科(I・II)と専門学科(人間探究科・自然探究科)併設
- 探究科は2002年度からSSH(Super Science High School)に2回指定
- 普通科Iのごく一部を除き, 大多数が進学

# 5. 事例(3)堀川高校

## 2) 探究型学習

■「探究基礎I・II」(「総合的な学習の時間」と教科「情報」をあわせた堀川独自の専門科目)

1年前期「HOP」:スキルの習得

1年後期「STEP」:ゼミでの調査準備

2年前期「JUMP」:探究活動の実践

■「堀川フォーマット」に基づく論文作成

■公開発表会(ポスター)

# 5. 事例(3)堀川高校

## 3) 学校図書館

### ■ 探究型学習との関わりにおける特徴:

人間探究科を中心に、年間250時間程の授業が図書館で行われている。

# 5. 事例(4)尾瀬高校

## 1) 学校の特徴:

- 1学年2学級定員80名の小規模校
- 自然環境科(自然環境コース・環境科学コース)  
普通科(人文科学コース・経営情報コース)
- H18年度～20年度, 科学技術振興機構 SPP  
(Science Partnership Project)指定校
- 地元生徒募集枠 と全国からの生徒募集枠
- 半数の生徒が就職を目指す

# 5. 事例(4)尾瀬高校

## 2) 探究型学習:

■ 1, 2年次:「環境実践」「環境測定」「総合尾瀬 I II」などの学校設定科目でテーマさがし

3年次: 課題研究

■ 3年次10月, 課題研究発表会

11月, 独自のフォーラムでポスター発表

12月, 地域での発表会

■ 1年次の最初のフィールドワークは3年生が案内

■ 普通科にも, 「学び探求」科「学び入門」科目設定

# 5. 事例(4)尾瀬高校

## ■ 自然環境棟の設備(ミーティングルーム2)



(C)松田・今井・金・根本

# 5. 事例(4)尾瀬高校

## 3) 学校図書館

### ■ 探究型学習との関わりにおける特徴:

- ・総合的な学習の時間, 「学び入門」を初め, 普通教科でも日常的に利用されている
- ・自然環境科の授業ではまったく使われていない

# 6. 考察

## ■ 探究型学習の現状

- 1) 探究型学習カリキュラムの特徴
- 2) 理系の探究型学習・文系の探究型学習

## ■ 探究型学習への学校図書館の関与

- 3) 探究型学習に対する学校図書館
- 4) 学校図書館が関与できていない要因

## 6. 考察

### 1) 探究型学習カリキュラムの特徴

	尾瀬： 自然探究型	堀川： 学問探究型	神奈川総合： 自己探究型
目標	自然と共生 出来る人材 を育む	大学での研 究活動の準 備	自己と向き 合った結果 の進路実現
発表形式	ポスター 発表	論文	表現活動

目標, 発表形式によって特徴付けられる探究型学習カリキュラムの種類

## 6. 考察

### 1) 探究型学習カリキュラムの特徴

#### ■ 探究型学習カリキュラムの3つの型における共通点

- ・最終的な成果の発表に至るまで1.5年ないし3年の連続したステップがある。
- ・生徒の探究型学習のモチベーションを上げるために異学年同士の学びが仕組まれている。
- ・探究型学習に取り組む中で、生徒が系統型学習の必要性にも気付くことが目指されている。

## 6. 考察

### 2) 理系の探究型学習・文系の探究型学習

■尾瀬, 堀川では理系科目で探究型学習が活発に行われている。

・考えられる背景

i) 現行学習指導要領における「理科」と「探究」の親和性

ii) 文科省を中心とした理科教育振興策

## 6. 考察

### 2) 理系の探究型学習・文系の探究型学習

#### i) 現行学習指導要領における「理科」と「探究」の親和性

##### ・尾瀬自然環境科

「自然環境科は理数科として位置づけています。そもそも理数科が探究的な力を高めるための学科なので、(学習内容をわかりやすくするには)探究科の方がよかったんじゃないのかなと思います。学科名としてはこういう名前になっています。」  
(尾瀬 B先生)

##### ・堀川探究科

「探究科」の名前の由来は理科の指導要領に「探究」の言葉が頻出することに気づいた理科の教師による発案

## 6. 考察

### 2) 理系の探究型学習・文系の探究型学習

i) 現行学習指導要領における「理科」と「探究」の親和性

■ 現行学習指導要領では、「総合的な学習の時間」以上に「理科」で「探究」という言葉が頻出する。

例:「理科」の「目標」

「自然に対する関心や探究心を高め，観察・実験などを行い，科学的に探究する能力と態度を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を深め，科学的な自然観を育成する」

→理科の教師は探究型学習の指導に元々なじんでいると思われる。

## 6. 考察

### 2) 理系の探究型学習・文系の探究型学

#### ii) 文科省を中心とした理科教育振興策

##### 堀川

「平成14年にSSHに指定されたことから、予算が付き実験器具や、TAなどの人材を付ける事が出来るようになり、その頃から授業と分離して研究的なことができるようになった。探究基礎についても研究色が強くなった。ただし、文系ゼミはSSHのお金が使えないので、京都市教育委員会から予算をつけてもらっている。」

(堀川 A先生)

##### 尾瀬

「学科だけで1千万円以上外部からもらっていますのでそういうお金を使って(発表会を)毎月毎月やる。」(尾瀬 B先生)

→文系との資金面におけるギャップ。

## 6. 考察

### 3) 探究型学習に対する学校図書館

	湘南	神奈川総合	堀川	尾瀬
1) 教師から見た学校図書館	<ul style="list-style-type: none"><li>・読書</li><li>・受験勉強の場</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・自学自習の場</li><li>・レポートのアーカイブ</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・読書</li><li>・自習の場</li><li>・レフェラルサービス</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・文学に偏った資料</li><li>・生徒の学習のための仕掛けに対する意欲が不足</li></ul>
2) 学校図書館の探究型学習への関わり方	生徒が自力で問題解決出来るように資料を充実させる	個別の生徒のテーマに沿って支援する	人間探究科の授業を中心に年間250コマの授業を支援する	自然環境科以外の授業で、「調べ学習」が行われている

## 6. 考察

### 3) 探究型学習に対する学校図書館

- 湘南高校：学校図書館が授業に関与できない状況
- 神奈川総合高校：授業単位での利用や教科との連携が十分でない。
- 堀川高校：理系分野での利用が少なく，理系のレファレンスには対応できていない。
- 尾瀬高校：自然環境科の授業に対して学校図書館のサポートはできていない。

## 6. 考察

### 4) 探究型学習に関与できていない要因

- i) 教員の学校図書館に対する認識のズレ
- ii) 学校図書館職員の教育課程に対する関与の不足
- iii) 学校図書館側の理系分野に対するノウハウ不足

## 6. 考察

### 4) 探究型学習に関与できていない要因

#### i) 教員の学校図書館に対する認識のズレ

- ・「読書センター」「自学自習の場」の認識は共通して持っている。
- ・探究型カリキュラム企画経験がある教職員は少なくとも、学校図書館の「学習・情報センター」の機能に関する認識を断片的にせよ持っている。
- ・しかし、探究型学習に図書館資料を扱う人が果たす役割についての認識を持つ教師は稀である。

## 6. 考察

### 4) 探究型学習に関与できていない要因

#### ii) 学校図書館職員の教育課程に対する関与の不足

- ・学校司書が学校の教育課程に関わる校務分掌ではなく、資産の管理や総務に関わる校務分掌に固定的に配置されている。
- ・司書教諭が置かれている3校中、堀川のみ教育課程に関わる分掌に配置。だが、流動的。
- ・学校司書の「指導」に対する抵抗感。

例:「司書は授業はあまりしたくない。司書教諭は自分の授業があつて物理的に難しい。そこで図書館で授業をする担当者に指導してもらうというように変化してきた。」(堀川 学校司書)

## 6. 考察

### 4) 探究型学習に関与できていない要因

#### iii) 学校図書館の理系分野に対するノウハウ不足

- ・尾瀬と堀川では、理系分野で学校図書館の資料ではなく、独自に収集された資料が使われている。
- ・学校司書の発言でも、理系分野に対しては“お手上げ”という状況が見られた。

## 6. 考察

### 4) 探究型学習に関与できていない要因

#### iii) 学校図書館の理系分野に対するノウハウ不足

#### ■ 背景として考えられる点

- ・学校図書館職員個人の属性
- ・学校図書館の予算
- ・司書教諭，司書の養成課程の問題
- ・資格取得後の研修制度の欠如
- ・日本における学校図書館の歴史的な位置づけ
- ・日本の学校教育の教育方法の問題
- ・戦後の学習環境整備の方針に関わる法律が，学校図書館を文系的な環境に留めた可能性

など

# 7. 日本の高等学校における

## 探究型学習の課題

- 1) 探究型学習は生徒のモチベーションが要求されるが、そもそもモチベーションが高い生徒を集めるのは難しい。
- 2) 大学入学時の探究型学習のスキルとモチベーションの格差の拡大に大学側が対応できていない。
- 3) 探究型学習における生徒の多様なテーマ設定に対して、教師が従来の教科の専門性の視点で取り組もうとするために、困難が生じてしまう。
- 4) 探究型学習カリキュラムを遂行する人材と環境整備のための予算確保が難しい。

## 8. 提言

■ 4)の課題は国の教育予算レベルの提言となる。それ以外の1)～3)の課題解消に向けて高校の学校図書館が担うべき役割は以下のとおり。

- 1) 高校に入学してきた生徒の探究型学習へのモチベーションをあげる働きかけを積極的に行う。
- 2) 探究型学習を育む情報リテラシー教育のカリキュラムを学校図書館と大学図書館が協働で開発し、内容に系統性を持たせ、大学における初年次教育の効果をあげる。
- 3) 学校内外のさまざまな専門性の持ち主を有機的に結びつけるゲートキーパーとしての役割を担う。

## 9. 今後の課題

- 1) 学校図書館が学校全体の探究型学習に十分対応していくためのモデル形成並びに実践段階での適応とその検証
- 2) 生徒の側からの探究型学習の効果についての検証
- 3) 学習指導要領以外の、中央教育審議会答申や臨時教育審議会答申が学校カリキュラムに与えた影響に関する背景の検討や、学習方法史的な研究